

○はやりかにかうちさ  
さめきたるも 元氣  
で勢こんでがや／＼  
話し立ててゐるのも  
○蓮の露は玉と 古  
今集巻三に遍照「蓮  
葉の濁りにしまぬ心  
もて何かは露を玉と  
あざむく」  
○御方こそ この  
「こそ」は呼格の「こ  
そ」で人の名の下に  
つけるもの、係の「こ  
そ」でない。  
○まろが女院 私の  
お仕へ申してゐる女  
院さういふ意。  
○大王の宮 件直方  
云「大王は帝王の意  
か」  
○ききやう 桔梗に  
「經」をかけていつた  
ものやうだ。  
○大ざうにぞ似させ  
給へる 一通り似て  
いらつしやる。

に居たる、皆見し心地す。「御方こそ、この花はいかゞ御覽する。」と言へば、「いざ人々に譬へ聞えむ。」とて、命婦の君、「かの蓮の花は、まろが女院のわたりにこそ似奉りたれ。」とのたまへば、大君、「下草の龍膽はさすがなめり。一品の宮と聞えむ。」中の君、「玉簪花は大王の宮にもなどか。」三の君、「紫苑の花やかなれば、皇后宮の御さまにもがな。」四の君、「中宮は、父大臣常にききやうをよませつゝ、いのりがちなめれば、それにもなどか似させたまはざらむ。」五の君、「四條の宮の女御、露草のつゆにうつろふとかや、明暮のたまはせしこそ、誠に見えしか。」六の君、「垣穂の瞿麥は帥殿と聞えまし。」七の君、「刈萱のなまめかしき様にこそ、弘徽殿はおはしませ。」八の君、「宣耀殿は菊と聞えさせむ。宮の御おほなるべきなめり。麗景殿は、花薄と見えたまふ御さまぞかし。九の君。」と言へば、十の君、「淑景舎は朝顔の昨日の花と歎かせ給ひしこそ、道理と見奉りしか。」五節の君、「御匣殿は野邊の秋萩とも聞えつべかめり。」東の御方、「淑景舎の御大臣の三の君、あやまりたることはなけれど、大ざうにぞ似させ給へる。いとこの君ぞ。其の御大臣の四の君は、くさのかうといさ聞えむ。」姫君、「右大臣殿の中の君は、見れども飽かぬ女郎花のけはひこそしたまひつれ。」西の御方、「帥の宮の御うへは、さまにや似させ給ひつる。」伯母君、「左大臣殿の姫君は

○くさのかう へん  
るうた(露香)といふ  
植物の異名。  
○渡らせ給はざむめ  
れはよ、つみを離れ  
むとて 一本に「  
…よつらを離れむ…  
…」とある。  
○をかしきは皆取ら  
れ奉り 風情のある  
草木の名は皆それぞ  
れの方々に譬へられ  
てしまつたから。  
○さむはれ 「ま  
よ。さもあらはあれ」  
なごの意。

○いづれと分かず  
ごちらが優つてゐる  
か、少したりとも其  
の優劣がつけかねる

吾木香に劣らじ顔にぞおはします。」などいひおはさうすれば、尼君、「齋院こそうと聞え侍らむか、渡らせ給はざむめればよ、つみを離れむとて、かゝる様にて、久しくこそなりにけれ。」と宣へば、北の方、「さて齋宮をば、何とか定め聞え給ふ。」と言へば、小命婦の君、「をかしきは皆取られ奉りぬれば、さむはれ軒端の山菅に聞えむ。まことやまろが見奉る帥の宮のうへをば、芭蕉葉ときこえむ。」よめの君、「中務の宮のうへをば、まねく尾花と聞えむ。」など聞えおはさうする程に、日暮れぬれば、燈籠に火ともさせて添ひ臥したるも、花やかにめでたくもおはしますものかなと、あはれしはしはめでたかりしことぞかし。世の中のうきを知らぬと思ひしにこは日に物はなげかしきかな命婦の君は、「蓮のわたりも、此の御かたちも、この御方など、いづれ勝りて思ひ聞え侍らむ、にくき枝おはせかし。はちす葉の心廣さの思ひにはいづれと分かず露ばかりにも六の君、はやりかなる聲にて、「瞿麥を床夏におはしますといふこそうれしけれ。とこなつに思ひしけしと皆人はいふなでしこと人は知らなむと宣へば、七の君したりがほにも、

○まろがきくの御うた一本に「まろがきく御方」とある。聞くに菊をかけてある。

○おざろかれて目さめて。

○うち臥したればしほらく横になつてゐたら、やがて寢入つてしまつた。

○寢おびれたる聲寢つけた不明瞭な聲

刈萱のなまめかしさの姿にはそのなでしこも劣るとぞ聞く  
と宣へば、皆々も笑ふ。「まろがきくの御うたこそ、ともかくも人に言はれ給はね。  
植ゑしよりしけりしまゝに菊の花人に劣らで咲きぬべきかな。」  
とあれば、九の君、「羨しくも思ふなるかな、

秋の野の亂れて靡く花すゝき思はむかたに靡かざらめや。」  
十の君、「まろが御前こそ怪しき事にて、くらされて。」などいとはかなくて、

朝顔の疾くしほみぬる花なれば明日も咲くはと頼まるゝかな

と宣ふにおどろかれて、五の君、「うち臥したれば、はや寢入りにけり。何ごとのたまへるぞ、まろは華やかなる所にし候はねば、よろづ心細くも覺ゆるかな。

たのむ人露草ごとに見ゆれば消えかへりつゝ歎かるゝかな。」

と、寢おびれたる聲にて、また寢るを人々笑ふ。女郎花の御方、「いたく暑くこそあれ。」とて、扇を使ふ。「いかにとて参りなむ、戀しくこそおはしませ。

みな人も飽かぬ匂ひを女郎花よそにていと歎かるゝかな。」

夜いたく更けぬれば、皆寢入りぬるけはひを聞きて、

秋の野の千草の花によそへつゝなど色ごとに見るよしもがな

とうち嘯きたれば、「あやし、誰がいふぞ、覺えなくこそ。」と言へば、「人は只今はいかゝあらむ、今頃（この深夜）人雷が妙な聲で響きかゝらう。はすはなからう。」  
○おほめく聲はあり  
○知らぬかおほめくはおほろけにてはつきり聞き分け得ぬをいふ。「本に」とあり「知りぬる」とある。  
○このすきものたらけり。不明。  
○いかにあらむ一本に「いかに思ふにかあらむ」とある。  
○ふるめかしうもてなし給ふものかな  
○當世風にもつみやすやすと心ゆるして色よい返事もしてくれようとはせず、頑固に冷淡にもてなしたることよ、と怨じたのである。  
○いらへやせまし一本には「出でやせまし」とある。  
○殿はら、宮はらは複数を表はす接尾語。名門の子息達姫君たちのこと。

「思ふ人見しも聞きしも數多ありておほめく聲はありと知らぬか

このすきものたらけり、あな、かま。」とて物も言はねば、簀子に入りぬめり。「あやし、いかなるぞ、一所だにあはれと宣はせよ。」など言へば、いかにあらむ、絶えて答へもせぬほどに、曉になりぬる空の氣色なれば、「まめやかに見し人とも思したらぬ御なげきどもかな。見も知らぬふるめかしうもてなし給ふものかな。」とて、

百かさね濡れ馴れにたる袖なれど今宵やまさり濡ちて歸らむ

とて出づる氣色なり。例のいかになまめかしうやさしき氣色ならむ、いらへやせましと思へど、あぢきなし、一所にとぞ思ひける。

この女たちの親賤しからぬ人なれど、いかに思ふにか、宮仕へに出したてて、殿ばら。

○同じ兄弟 同じ母から生れた兄弟。○皆挑ませ給ふ 互に勢力を張らうと相しのぐこと。○見つともいふな 古今集戀三「君が名も我が名も立てじ難波なるみつともいふな逢ひきとも言はじ。」○いみじくねぶたし 伴直方云「ねぶたしはね(妬)たしの窓か。」この説是か。○眞帆にはあらで 十分でなく。○誰そまやまを 一本には「誰ぞやるを。」○にほびやかに 美しくつや／＼したさまにいふ。○「さわがぬ水ぞ」 續詞華集賀部、藤原長能「君が代の千させの松の深緑騒がぬ水に影ぞ見えつる。」

○澄まぬに見ゆる 拾遺集雜部に讀人知らず「よと共雨降る宿のにはたづみすまぬに影は見ゆるものかは。」○心憎く 奥床しくなつかし。○手習にしたりける 落書きした。○かたち・しつらひ 容貌・化粧など。○此處にはしそくおほくして 親屬(身内)多くしてか。一本には「しほしはおほしくて」などいふ。

堤中納言物語 宮ばら・女御達の御許に、一人づゝ参らせたるなりけり。同じ兄弟ともいはず(で)他人の子になしつゝ、ぞありける。この殿ばらの女御たちは、皆挑ませ給ふ御中に、同じ兄弟の別れて候ふぞ怪しきや。皆思して候ふは知らせ給はぬにやあらむ。好色ばらの御有様ども、聞き嬉しと思ひ至らぬ處なれば、此の人どもも知らぬにしもあらず。かの女郎花の御方と言ひし人は、聲ばかりを聞きし、志深く思ひし人なり。瞿麥の御人といひし人は、睦しくもありしを、いかなるにか「見つともいふな。」など誓はせて、又も見ずなりにし。刈萱の御人は、いみじく氣色だちて、物言ふ答へをのみして、辛うじて年経つべき折は、いみじく賺し謀る折のみあれば、いみじくねぶたしと思ふなりけり。菊の御人は、言ひなどはせしかど、殊に眞帆にはあらで「誰、そまやまを。」とばかり仄かに言ひて、膝行いりしけはひなむいみじかりし。花薄の人は、思ふ人も又ありしかば、いみじくつゝみて、唯夢の様なりし、宿世の程もあはれに覺ゆ。蓮の御人は、「いみじくしたのめでざらば。」と契りしに、騒しきことのありしかば、引き放ちて入りにしを、いみじと思ひながら許してき。紫苑の御人は、いみじく語りて、今にむつまじかるべし。朝顔の人は、若うにほびやかに愛敬つきて、常に遊び敵にてはあれど、名残なくこそ。桔梗は常に恨むれば、「さわがぬ水

ぞ。」と言ひたりしかば、「澄まぬに見ゆる。」と言ひし、にくからず、何れも知らぬは少くぞありける。其の中にも、女郎花のいみじくをかしく、ほのかなりし末ぞ、「今にいかで唯よそにて語らはむ。」と思ふに、心憎く、今一度ゆかしき香を、いかならむと思ふも、定めたる心なくぞありくなる。至らぬ里人などは、いともて離れて言ふ人をば、いとをかしく言ひ語らひ、兄弟といひ、いみじくて語らへば、暫しこそあれ、顔容貌のみになどかくはある。物言ひたるありさまなども、この人には、かゝるいとなかり。宮仕へ人、さならぬ人の女なども謀らるゝあり。内裏にも参らず徒然なるに、かの聞きし事をぞ、その女御の宮とて、のどかには、かの君こそ容貌をかしかねなど、心に思ふこと歌など書きつゝ、手習にしたりけるを、又人の取りに書きうつしたれば怪しくもあるかな、これら作りたる様も覺えず、よしなき物のさまを、虚言にもあらず、世の中に虚物語多ければ、實ともしもや思はざらむ。これ思ふこそ妬けれ。多くはかたち・しつらひなども、この人の言ひ心がけたるなめり。誰ならむ、この人を知らばや。殿上には、只今これをぞ、怪しきをかしと言はれ給ふなる。かの女だちは、此處にはしそくおほくして、かく一人づゝ参りつゝ心々に任せて逢ひて、斯くをかしく殿の事言ひ出でたるこそをかしけれ。それもこのわたり、い

○その人を書きつけ給ふべし。「誰ならむこの人を知らばや」とあるをうけた話。

○はいずみ・掃き墨の義。胡麻油又は菜種油などの油煙を膠に和して墨を製し、又漆澁などに和して器物などを塗る下染とする。

○品賤しからぬ人の子ども。一本に「人の事も叶はぬ」とあるが妥當でない。

○親聞きつけて二度目の女の親のこゝもとの人。初の女

○妻居を給へる人。妻具し給へると同じく妻帯せる人。

○人数にこそ侍らぬ。有名な人の仲間ごに數へられる程の立派なものではありませんが。

と近くぞあなるも、知り給へる人あらば、その人と書きつけ給ふべし。

はいずみ

下わたりしもに、品賤しなしからぬ人の子ども、叶はぬ人をにくからず思ひて、年ごろ経るほどに、親しき人の許へ行き通ひける程に、女を思ひかけて、みそかに通ひありきけり。珍しければにや、初めの人よりは志深く覺えて、人目もつゝ、まず通ひければ、親聞きつけて、「年ごろの人をもち給へれども、いかゞせむ。」とて許して住ます。もとの人聞きつけて、「今はかぎりなめり、通はせてなどもよもあらせじ。」と思ひわたる。「往くべきところもがな、つらくなり果てぬ前に離れなむ。」と思ふ。されどさるべき所もなし。今の人の親などは、おし立ちて言ふやう、「妻などもなき人の切に言ひしに婚すべきものを、かく本意にもあらで、おはしそめてしこそ口惜しけれど、いふかひなければ、かくてあらせ奉るを、世の人々は妻居を給へる人を思ふと、さいふも家に居るたる人こそ、やごとなく思ふにはあらめ、などいふもやすからず、實にさる事に侍る。」と言ひければ、男、「人数にこそはべらねど、志ばかりは勝る人侍らじと思ふ。彼處には渡し奉らぬを、おろかに思さば、只今も渡

○さらにあらせ給へ。伴直方云「さらに」は「また」の誤りか。「然るに」の義なり。

○あてにこそしき人。美しくて大やうな人柄。

○彼處につちをらすべきを。不明。一本に「つちをらすべきを」とある。

○今にてはあらず、唯しほしの事なり。今すぐにさいふわけにはゆかない、ほんの暫くの間お待ち給はれ。

し奉らむ、いと異様になむ侍る。」といへば、親、「さらにあらせたまへ。」と押し立ちていへば、男、あはれかれも何方遣らましと覺えて、心の中悲しけれども、「今のがやごとなければ、かく。」など言ひて、氣色も見むと思ひて、もとの人のがりにぬ。見れば、あてにこそしき人の、日ごろ物を思ひければ、少し面瘠せていとあはれけなり。うち恥ぢしらひて、例のやうに物言はで、しめりたるを、いと心苦しう思へど、然言ひつれば、言ふやう、「志ばかりは變らねど、親にも知らせで、斯様に罷りそめてしかば、いとほしさに通ひはべるを、つらしと思すらむかしと思へば、何とせしわざごと、今なむ悔しければ、今もえかき絶ゆまじうなむ。彼處につちをらすべきを、此處に渡せとなむいふを、いかゞ思す。外へや往なむと思す。何かは苦しからむ。かくながら端つ方におはせよかし。忍びて忽ち何方かはおはせむ。」など言へば、女、此處に迎へむとていふなめり。これは親などあれば、此處に住まふともありなむかし。年ごろ行く方もなしと、みるく、斯く言ふよと、心憂しと思へど、つれなく答ふ。「さるべき事にこそ。はや渡し給へ。何方もく往なむ。今までかくてつれなく、憂き世を知らぬ氣色こそ。」といふ。いとほしきを、男、「など斯う宣ふらむや。今にてはあらず、唯暫しの事なり。歸りなば又迎へ奉らむ。」と、言ひ置きて出でぬ

○つかふ者 召使。  
 ○大原のいまこも  
 と仕へてゐる召使の  
 ことだらう。  
 ○さるべき所の出で  
 来むまでは 適當な  
 宿りが出来るまでは  
 ○恥しげなる物 他  
 人に見られて困る消  
 息文などのこと。  
 ○今宵なむ物へ渡ら  
 む 今夜ごごへ行  
 かう。  
 ○女待つて 女の  
 方が通ひ来る筈の男  
 を待つて。  
 ○うちそはむきて  
 わきを向いて平氣を  
 装うてゐること。  
 ○車は牛たがひ 車  
 にしようと思つたが  
 折悪しく引くべき牛  
 が間に合はず。  
 ○車は所狭し この  
 狭い土地では車なご  
 で大がよりで往くと  
 人目に立つて心苦し  
 い。

る後、女つかふ者とさし向ひて泣き暮す。「心憂きものは世なりけり。いかにせまし、おり立ちて来むには、いとかすかにて出で見えむもいと見苦し。いみじけに怪しうこそはあらめ、かの大原のいまこが家へ往かむ。かれより外に知りたる人なし。」かくいふは、もとつかふ人なるべし。「それは片時おはしますべくも侍らざりしかども、さるべき所の出で来むまでは、まづおはせ。」など語らひて、家の内清けに掃かせなどする。心地もいと悲しければ、泣くく恥しげなる物焼かせなどする。今の天明日なむ渡さむとすれば、この男に知らすべくもあらず。車なども誰にか借らむ、送れとこそは言はめと思ふも、をこがましけれど言ひ遣る、「今宵なむ物へ渡らむと思ふに、車暫し。」となむ言ひやりたれば、男あはれ何方にとか思ふらむ、往かむさまをだに見むと思ひて、今此處へ忍びて来ぬ。女待つとて端に居たり。月の明きに泣く事限りなし。

我が身かくかけ離れむと思ひきや月だに宿をすみ果つる世に

と言ひて泣く程に、来ればさりけなくて、うちそはむきて居たり。「車は牛たがひて馬なむ侍る。」といへば、「唯近き所なれば車は所狭し。さらばその馬にても、夜の更けぬ前に。」と急げば、いとあはれと思へど、彼處には皆朝にとおもひためれば、遁るべうもなければ、

○丈はかりなり 頭  
 髪の長さが身長と同  
 じ程である。  
 ○敢へなむ 苦しう  
 ない。我慢も出来ま  
 せう。  
 ○この人 この女の  
 人。  
 ○念じつれ っらい  
 のを堪へ忍んでゐ  
 た。  
 ○しるべにて 道案  
 内者として。  
 ○唯こゝもと すぐ  
 近い所。  
 ○あはれたる家 あ  
 はら家。  
 ○人やりならず 我  
 と我が心から。

心苦しう思ひく、馬牽き出させて、簀子に寄せたれば、乗らむとて立ち出でたるを見れば、月のいと明きかけに、有様いとさゝやかにて、髪はつやゝかにて、いとものと美しけにて、丈ばかりなり。男、手づから乗せて、此處彼處ひきつくらふに、いみじく心憂けれど、念じて物も言はず。馬に乗りたる姿頭つき、いみじくをかしげなるを、哀れと思ひて、「送りに我も参らむ。」といふ。「唯こゝもとなる所なれば、敢へなむ。馬は只今返し奉らむ。その程は此處におはせ。見苦しき所なれば、人に見すべき所にも侍らず。」といへば、さもあらむと思ひて、とまりて尻うち懸けて居たり。この人は、供に人多くは無く、昔より見馴れたる小舎人童一人を具して往ぬ。男の見つる程こそかくして念じつれ、門ひき出づるより、いみじく泣きて行くに、この童いみじくあはれに思ひて、このつかふ女を<sup>①</sup>しるべにて、はるく<sup>②</sup>とさして行けば、「唯こゝもとと仰せられて、人も具せさせ給はで、かく遠くはいかに。」といふ。山里にて人も歩かねばいと心細く思ひて泣き行くを、男もあはれたる家に、唯一人ながめて、いとをかしげなりつる女さまの、いと戀しく覺ゆれば、人やりならず、いかに思ひ居つらむと思ひ居たるに、やゝ久しくなり行けば、簀子に、足しもにさし下しながら寄り臥したり。

○はや馬率て参りねはやく馬をつれて行き給へ。前の「馬は只今返し奉らむ」に應ずる語。

○いづこにかの歌 風葉集戀三にある歌で、伊勢では「……あかね別れの涙川まで」とある。

○男うちおどろきて男が目覺して。……戀ふるわざかなさいふにぞ、と歌嘯き詠じた丁度その時に。

○ありつる歌 さつきの歌。即ち「いづこにか」の歌。

○つれなしを作りけるにこそ 伴直方云「つれなしがほ」の誤脱か。強ひて悲しさをおし隠して平氣を装つてゐたのであらう。

この女は、いまだ夜中ならぬさきに往きつきぬ。見ればいと小き家なり。この童、「いかに斯かる所には、おはしまさむする。」と言ひて、いと心苦しと見居たり。女は、「はや馬率て参りね、待ち給ふらむ。」と言へば、「何處にかとまらせ給ひぬるなど仰せ候はば、いかゞ申さむする。」と言へば、泣くく、「斯様に申せ。」とて、

いづこにか送りはせしと人間はば心は行かぬなみだ川までといふを聴きて、童も泣くく馬に打乗りて、程もなく來著きぬ。

男うちおどろきて見れば、月もやうく山の端近くなりたり。怪しく遅く歸るものかな。遠き所へ往きけるにこそと思ふも、いとあはれなれば、

住み馴れし宿を見捨てて行く月の影におほせて戀ふるわざかな

といふにぞ、童ばかり歸りたる。「いと怪し。など遅くは歸りつるぞ。何處なりつる所ぞ。」と問へば、ありつる歌を語るに、男もいと悲しくてうち泣かれぬ。「此處にて泣かざりつるは、つれなしを作りけるにこそ。」と、あはれなれば、「往きて迎へ返してむ。」と思ひて、童に言ふやう、「さまでのゆゑしき所へ往くらむとこそ思はざりつれ、いとさる所にては、身もいたづらになりなむ。猶迎へ返してむとこそ思へ。」と言へば、「道すがら小止みなくなむ泣

○實にいと小さくあはれたる家 一本に「あはなる……」とあるは誤。

○ながれ來にけり 流れに泣かれをかく○をこたりを言へど 過意の罪を詫びたが。

○更に聞えやるべくもなし 今更申譯がない。

○煩ひければ 煩つてゐたので。

○いと引切りなりける心にて 物事にいらだつ心即ち性急いで。

○あからさまに ほんの一寸の間。

かせ給へ。あたら御さまを。」といへば、男、明けぬさきにとて、この童供にて、いと疾く往き著きぬ。實にいと小さくあはれたる家なり。見るより悲しくて、打ち叩けば、この女は來著きにしより、更に泣き臥したる程にて、「誰ぞ。」と問はすれば、この男の聲にて、

涙川そことも知らずつらき瀬を行きかへりつ、ながれ來にけり

といふを、女、いとと思はずに、「似たる聲かな。」とまであさましう覺ゆ。「開けよ。」といへば、いと覺えなけれど、開けて入れたれば、臥したる所に寄り來て、泣くくをこたりを言へど、答へをだにせ、泣く事限りなし。「更に聞えやるべくもなし。いと斯かる所ならむとは、思はでこそ出し奉りつれ。かへりては、御心のいとつらくあさましきなり。萬は長閑に聞えむ、夜の明けぬ前に。」とて、搔き抱きて馬にうち乗せて往ぬ。女、いと淺ましくいかに思ひなりぬるにかと、呆れて往き著きぬ。おろして二人臥しぬ。萬に言ひ慰めて、今よりは更に彼處へ罷らじ、かく思しける。」とて、又なく思ひて、家に渡さむとせし人は、「此處なる人の煩ひければ、折悪しかるべし、この程を過して、迎へ奉らむ。」と言ひ遣りて、唯こゝのみありければ、父母思ひ歎く。この女は、夢のやうに嬉しと思ひけり。此の男、いと引切りなりける心にて、「あからさまに。」とて今の人の許に晝間に入り來る

○殿おはすや 殿がいらつしやいましたよ、まあ、こんなまづい恰好をしてゐる處へ。  
 ○しろきもの 和名抄に、「粉、文選好色賦に云ふ、著粉即太白、和名、之呂岐毛能能。」とある。白粉のこと。  
 ○おろ／＼にならして 不十分ながら一面に塗りつけて。  
 ○夕まぐれにしたてたり 夕暮に化粧した。  
 ○および形 指の形  
 ○斯く來たりと聞きて來たるに 通ひ來る男が斯く來り訪づれたよしを聞いて挨拶でもしようと思つて來たのに。  
 ○斯かれは我もおびえて、斯くあれは即ち斯様な面相であるので。  
 ○ゆすりみちて にごたごた騒ぎをして。

を見て、女俄に、「殿おはすや。」といへば、うちとけて居たりける程に心騒ぎて、「いづら、何處にぞ。」と言ひて、櫛の箱を取り寄せて、しろきものをつくとと思ひたれば、取り違へて、掃墨入りたる疊紙を取り出でて、鏡も見ずうち裝束きて、「女はそこにて暫し入り給ひそといへ。」とて、是非も知らずさしつくる程に、「男いとくも疎み給ふかな。」とて、簾をかき上げて入りぬれば、疊紙を隠して、おろ／＼にならして、口うち覆ひて、夕まぐれにしたてたりと思ひて、斑におよび形につけて、目のきろ／＼としてまた、き居たり。男見るに、あさましう珍かに思ひていかにせむと恐ろしければ、近くも寄らで、「よし、今暫時ありて參らむ。」とて、暫し見るも、むくつけければ往ぬ。女の父母、斯く來たりと聞きて來たるに、「はや出で給ひぬ。」といへば、いとあさましく、「名残なき御心かな。」とて、姫君の顔を見れば、いとむくつけくなりぬ。怯えて父母も倒れふしぬ。女、「など斯くは宣ふぞ。」といへば、「その御顔は加何になり給ふぞ。」ともえ言ひやらず。「怪しくなど斯くはいふぞ。」とて、鏡を見るまゝに、斯かれは我もおびえて、鏡を投げ捨て、「いかになりたるぞや。いかになりたるぞや。」とて泣けば、家の内の人もゆすりみちて、「これをば思ひ疎み給ひぬべき事をのみ、彼處にはし侍るなるに、おはしたれば御顔の斯く成りにたる。」とて、

○例の膚に 涙に洗はれたら、生地（くわだ）の黒くないいつもの皮膚が露はれたのである  
 ○いたづらになり給へり 無用になる、人交りの出来ぬ様になつたなどの意。  
 ○よしなしごと 取りさめもないこと。  
 ○ゆゑむつ僧 いかにも修行を積んだ高徳らしい僧。  
 ○やまかつ・しなつく（け？）の戀まろ 不明。  
 ○かくたいしの女 伴直方云「くはう」か。

陰陽師呼び騒ぐほどに、涙の墮ちかゝりたる所の、例の膚になりたるを見て、乳母、紙おし揉みて拭へば、例の膚になりたり。「斯かりけるものを、いたづらになり給へり。」とて、騒ぎけるこそ、かへす／＼をかしけれ。

よしなしごと

人の侍く女を、ゆゑだつ僧、忍びて語らひけるほどに、年の果てに山寺に籠るとて、旅の具に、筵・疊・盥・匣、貸せと言ひたりければ、女、長筵何やかや供養したりける。それを女の師にしける僧の聞きて、我ももの借りにやらむとて、書いてやりける文の詞のをかしさに、書き寫して侍るなり。世づかすあさましきことなり。  
 「唐土新羅に住む人、さては常世の國にある人、我が國にはやまかつしなつくの戀まろなどや、かゝる詞は聞ゆべき。それだにも、すだれあみの翁はかくたいしの女に、名立ち賤しき中にも、心のおひさき侍りけるになむ。それにも劣りたりける心かなとは思すとも、理なき事の侍りてなむ、世の中の心細く悲しうて、見る人聞く人は、朝の霜と消え、夕の雲とまがひて、いと衰れる事がちにて、あるは少く、なきは數添ふ世の中。」と見え侍れ

○我が世や近く 正三位知家の歌に「そむくべき我が世や近くなりぬらむ心にかかる峯の白雲。」  
 ○吉野の山の 古今卷十八「み吉野の山のあたりに宿もがな世の憂き時の隠家にせむ。」  
 ○龜山 阿波の國由淺泊といふ所に龜のみ崎あり。海を隔てて紀伊の日高御崎(日の御崎)に向ふ。  
 ○鷄の峯 鷄足山をいふ。西域記にあり。  
 ○瓊江 樺津三島郡にあり。玉江の真流かりにたにこはで程ふる五月雨の空の歌が新撰集にある。  
 ○逢ふこと交野 逢ふこと難しをかけてある。  
 ○十符 陸前國宮城郡多賀城村にある。野田の菅又の名十符の菅を産する。

ば、『我が世や近く。』とながめ暮すも、心地つくしくだく事がちにて、猶世こそ電光よりもほどなく、風の前の火より消え易きものなれども、うらがなしく思ひつゞけられ侍れば、『吉野の山のあなたに家もがな、世の憂き時の隠家に。』と、際高く思ひ立ちて侍るを、いづこに籠り侍らまし。富士の嶺と淺間の峯との峽ならずば、龜山と日の御崎との絶間にまれ、さらずば、白山と立山とのいきあひの谷にまれ、又愛宕と比叡の山の中あひにもあれ、人のたはやすく通ふまじからむ所に、跡を絶えて籠り居なむと思ひ侍るなり。此の國は猶近し。唐土の五臺山、新羅の峯にまれ、それも猶げぢかし、天竺の山、鷄の峯の石屋にまれ、籠り侍らむ。それも猶地近し。雲の上にひらき登りて、月日の中にまじり、霞の中に飛び住まばやと思ひたちて、このごろ出で立ち侍るを、何方まかるとも身をすてぬものなれば、要るべきものども多く侍る。誰にかは聞えさせむ。年頃も御覽じて久しくなりぬ。情ある御心とは聞き渡りて侍れば、かゝる折だに聞えむとてなむ。旅の具にしつべきき物どもや侍る。貸さたませへ。まづ要るべき物どもよな。雲の上にひらきのほらむ料に、天羽衣一、いと料にはべる。求めてたまへ。それならでは、袖・袂、せめてはならば、布の破襖にても、又は十餘間の檜皮屋一・廊・寢殿・大殿・車宿も用侍れど、遠き程は、

○出雲筵 出雲の國産、枕草紙「いやしけなるもの」に「まここの出雲筵の疊」にある。  
 ○いきの松原 筑前博多の附近にあり。  
 ○みなをが浦 上總國君津郡法木村にあり。和名抄に「周匝郡三直地」とある。  
 ○田竝筵 紀伊國西牟婁田竝浦より産す。  
 ○なは筵 なはは撫津國難波の浦又はなはのつづら江の事。  
 ○近江鍋 伊勢物語に「近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋の敷見に」などある。  
 ○楠葉の御牧 河内國にあり。古事記崇神紀に地名に關する傳説がある。  
 ○さむ片岡 片岡は備前國邑久(おほく)郡。いま朝日村。  
 ○信樂 近江國甲賀郡の山開の地名。  
 ○連り篋 一本に川狩篋とあるは誤讀。

所狭かるべし。唯腰に結びつけて罷るばかりの料に、やかた一、疊などや侍る。錦端・高麗端・縹綱・紫端の疊、それ侍らずは布縁さしたらむ破疊にてまれ貸し給へ。瓊江に刈る真菰にまれ、逢ふこと交野の原にある菅薦にまれ、唯あらむを貸し給へ。十符の菅薦な給ひそ。筵は荒磯海の浦にうつるなる出雲筵にまれ、いきの松原の邊に出來なる筑紫筵にまれ、みなをが浦に刈るなる三總筵にまれ、底いる入江に刈るなる田竝筵にまれ、七條のなは筵にまれ侍らむを貸させ給へ。又それなくば破筵にても貸させ給へ。屏風も用侍る。唐繪・大和繪・布屏風にても、唐土の黄金を縁に磨きたるにてもあれ、新羅の玉を釘に打ちたるにまれ、これらなくば網代屏風の破れたるにもあれ貸し給へ。盥や侍る。丸盥にまれ、うち盥にもあれ、貸し給へ。それなくば、かけ盥にまれ貸し給へ。けぶりが崎に鑄るなる能登鼎にてもあれ、待乳河原に作るなる讃岐釜にもあれ、石上にあなる大和鍋にてもあれ、筑摩の祭に重ぬる近江鍋にてもあれ、楠葉の御牧に作るなる河内鍋にまれ、いちかどにうつなるまがりにまれ、とむ片岡に鑄るなる鐵鍋にもあれ、餘鍋にもあれ貸し給へ。邑久につくるなる火桶・折敷もいるべし。信樂の大笠、あめのしたの連り篋もたいせちなり。伊豫手箱・筑紫皮籠もほしく侍る。せめては浦島の子が皮籠にまれ、そでの皮袋にま



○伊豫手箱 新猿樂記「四郎君は」の條に諸國の産物をあけた中に「伊豫手箱」の語がある。  
 ○めうこくからし 不明。  
 ○斑鳩山 大和生駒郡。  
 ○三方 若狭國三方郡。  
 ○丹後和布 一本に「章魚女」とあるは誤。  
 ○若江の郡 河内國中河内郡。  
 ○掛田が峯 岩代國伊達郡掛田村か。  
 ○みちくの島 作直方云「みちく」は「みちのく」なるべし。  
 ○かゝる文など「人に」の下「な」の字を逸したらしい。  
 ○よしなし事ども 本文の題はこのあたりからつけたものらしい。  
 ○いかにぞや 「聞くことありしに」の語をうけ、語ることの自信なきをいふ。

れ貸し給へ。侘しき事なれど、露の命絶えぬ限りは食物も用侍る。めうこくからしの信濃梨、斑鳩山の枝栗、三方の郡の若狭椎、天の橋立の丹後和布、出雲の浦の甘海苔、みのはしのかもまがり、若江の郡の河内蕪と、野洲栗太の近江餅、小松が本の伊賀乾瓜、掛田が峯の松の實、みちくの島の郁子山女、ひこ山の柑子橋、これら侍らずは、やもめの邊の熬豆などやうの物賜はせよ。いでや、いるべき物どもいと多く侍る。せめてはたゞ足鍋一、なが筵一つら、鹽一なむ要るべき。もしこれら貸し給はば、心ながらむ人にな賜ひそ。ここに仕ふ童おほそうのかける二、うみ水のあわといふ二人の童に賜へ。出で立つ所は、科戸の原の上の方に、天の川の邊近く、鵲の橋つめに侍る。そこに必ず贈らせ給へ。此等侍らずば、え罷りのほるまじきなめり。世の中に物のあはれ知りたまふらむ人は、これらを求めて賜へ。猶世を憂しと思ひ入りたるを、諸心にいそがし給へ。かゝる文など人に見せさせ給ひそ。福つけたりけるものかなと見る人もぞ侍る。御返りはこゝによ。ゆめゆめ。徒然に侍るまゝに、よしなし事ども書きつくるなり。聞く事のありしに、いかにいかにぞや、おほえしかば、風のおと、鳥のさへづり、蟲の音、浪のうち寄せし聲に、たゞそへ侍りしぞ。」

○冬ごもる空……  
 以下本篇に關係はないのであるが、何れの本にものせてある

冬ごもる空の氣色に、しぐるゝたびにかき曇る袖の晴間は、秋より殊に乾く間なきに、羣雲霽れゆく月の殊に光さやけきは、木の葉がくれたになければにや、猶えしのばれぬなるべし、あくがれ出で給ひて、あるまじき事と思ひかへせば、外さまにと思ひた、せたまひ、猶えひき過ぎぬなるべし。いと忍びやかに入りて、數多の人のけはひするかたに、うちとけ居たらむ氣色もゆかしく、さりとともみづからの有様ばかりこそあらめ、何ばかりのもてなしにもあらじを、大かたのけはひにつけても。

堤中納言物語 終

543

1

終